ルッターの飜譯論

——Sendbrief vom Dolmetschen について——

塩谷饒

一

文筆の活動において質量共に肩を並べ得るものが少いと思われるルッターは、その驅使した言語について近代の言語研究者のように體系的な考察を行うことはなかったが、彼らの關心を十分に惹き得る省察を幾つか書き殘している。

たとえば、「新ドイツ語詩篇序言」Vorrede zum neuen Deutschen Psalter (1528) の中で、人間の人間たる所以は「語ること」reden にありと次の如く述べている。「まことに默せる人は物言う人に向えば半ば死せる人の如くにみなされる。およそ語ることより力强い、貴い業は人間にはない。それは人は形や他の業によるよりも語ることによってもっとも獸と區別されるからだ。何故なら木も彫師の巧みによって人の形をとり得るし、獸も人と同じく見、聞き、かぎ、歌い、歩き、立ち、食い、飲み、飢え、渴き得るし、空腹、寒さ、堅い床等に堪え得るからである。」

これはもとより素朴な觀察に基ずく言であるけれども、後に「人間は理性によって內的に他から區別されるが、言語によって外的の區別を得る」と論じたヘルダーや、「人間は言語によってはじめて人間である。」と述べたフンボルトの思想に先驅ける言說であって、ドイツ思想家の言語觀を歷史的に考察するなら必ずはじめに取り上げらるべきも

のであろう。彼が右の文において“reden”と言う言語の行動面に觸れた點が注目に値する。

また言語そのものを色々なものに譬えた記述が「ドイツ全市の市會議員に寄す」An die Ratherrn aller Städte deutsches Landes（1524）の中にある。ルッターは相當の語數を費して言語修得の効用と必要を說いた後に言う、

「成程福音はひとえに聖靈を通して來たものであり、また日毎に來るものであるが、それはやはり言語と言う手段を通して來たのである。・・言語がなければ福音は保たれない・・・言語はこの靈の劍の藏められる鞘であり、この寶石を容れる箱であり、この飲物食物を入れる器である。」

そこで彼は言語をおろそかにすれば福音は失われてしまうだろうと述べ、庶民の子が學校に入って母語やラテン語をよく修めるようにと勸めている。

福音の啓示が常人に解し難い神祕的な象徵によらず、言語を通してのみ行われることを力說した點で顧みらるべき文であるが、これを一般化して思想と言語の問題に至らしめることも不可能ではあるまい。

さらにルッターは右の文で牧師や聖書の註解者に向っては、聖書の原語たるヘブル語やギリシャ語を理解し、原意を正しく把むことが大切だと論じている。

言うまでもなく彼がラテン語からの重譯でなく、直接に原語から聖書を飜譯したことが、その飜譯史上劃期的な意義を持つ所以である。この點において彼は右の文中で勸めた以上のことを實行したわけだが、しかもその譯が廣くドイツ人に讀まれるように如何なる配慮をしたか、これを示すために多くのドイツ語史が左の卓上談話（Tischreden）中の一篇を引用している。

「私はドイツ語中の或るかけ離れた特別な言語ではなく、共通のドイツ語を用いる。それは高地の人々も低地の人人も共に等しく自分を解しうるためである。私はザクセンの官廳語を用いる。ドイツの凡ての王侯はこれに從っている。凡ての帝國直轄市を始め王侯の宮廷においてはザクセン官廳に從って記す。だからこれは凡てに共通した言語な

のだ。このようにして皇帝マクシミリアン、選擧侯フリードリヒ及びザクセン公[註(一)]は、神聖ローマ帝國においてドイツ語を一つに纏めてしまった。」

この言は今日の學問の術語を借りるなら、當時のドイツ語の言語地理的認識と、歷史的發展の趨勢に對する見通しが確實であったことを告げている。皇帝及びザクセン官廳語の一致がここであっさり記された程のものではなかったにせよ、はじめて共通語に自覺的に指向した人の發言として歷史的な價値が大きい。

これらの言と共にルッターの言語に對する考えを——具體的に母語についての深い理解を——示すものが、「飜譯についての書簡」Sendbrief vom Dolmetschen (1530) である。上述の言が或る標題のもとにおいて繰りひろげられた議論の一部をなしているか、又は斷片的に述べられたものであるのに對し、この文は題が告げるように飜譯という具體的な、そして特種な言語行動を主題として公刊された點が特異である。それが文學史において取上げられるほとんど唯一の飜譯論であるのは、此の分野における最初の纏つた發言として意を盡している理由によるだけではない。そこに展開された議論は一般論ではない。彼が如何なる態度で飜譯にのぞみ、如何に苦勞し、如何なる原則に從い、如何に飜譯したかを告げる消息である。自ら全力をあげてその衝に當ったものが實例によって示す所の說得力、眞理の敵と斷じた者に對する旺盛な戰鬪精神を反映する活潑な文體、單純な論旨に織込まれた巧みな比喩と機智、彼の中心思想の湧出、そしてまた全文の結構のほどよさ——これらが相俟って本文の文學的價値を十分認めさせる故である。

また彼の擧げる例文や特異な用語からドイツ語法や母語とラテン語との關係などがルッターの言語についての考えと共に察知されるので言語研究者の眼にも重要な文獻として映ずるものである。

二

この手紙は一五三〇年にコーブルクで記された。書上げられるとニュルンベルクの友人リンク W. Linck に送付

され、リンクが短い序を附して公刊したものである。

ルッターは同年四月廿三日から十月五日までコーブルクの城に滞在していた。この期間は前のヴァルトブルク滞在にも比すべきもので、舊約聖書の飜譯と手紙書きに時を送り、此處で記した手紙で今日殘っているものが實に一二五通に及んでいる。

しかもコーブルク滞在は自ら好んで著述三昧を目的として行つたものではない。彼の身は城の外へ一歩も出ることを許されぬ軟禁狀態にありながら、新教の危機を招來したアウクスブルク議會に陰の人として活躍した時期である。

アウクスブルク議會とは、侵入のトルコ軍を撃退し、フランス王をパヴィア Pavia の戰いで降し、ローマ法王をして同盟を結ぶことを餘儀なくさせたドイツ皇帝カール Karl V 1500-1558 がその餘勢をかって國内の宗教上の爭いを止めさせようとして一五三〇年三月諸侯を招集した議會であった。招集狀は「凡ての人の意見を聞き、兩教會の主張を比較し、唯一の眞の宗教を採用し、全國一教會となって一致するため」と稱したが、開會六日目の六月廿五日に朗讀された新教側の信仰告白に對し、八月三日その辯駁書が舊諸侯によって朗讀され、皇帝はこれを以て新教徒は說服されたとしたため兩派は正面からぶっかり結果は逆となったのである。さらに九月廿二日議會は過半數によって「新教徒は來年の四月十五日までに舊教に歸れ、以後は强制的に棄教されるであろう。たゞし一年以内に宗教會議を開いて現教會の弊害を除く。」と決議した。新教諸侯及び十四の自由市の代表はその場で直ちに抗議を宣告し、議席を總退場して歸國してしまったが、議會はなおも續き、ルッターを處刑してヴォルムス勅令を實施すべきこと等を議決して一月十九日閉會した。

Sendbrief vom Dolmetschen が書かれたのはこのような情勢の中においてである。全篇に漲る激しいポレミックな調子は以上の事實から了解されるであろう。これが單なる書齋人の飜譯回顧談ではないことは言うまでもない。

その內容も實はアウクスブルク議會において討論された二つのことがらに彼の答を與えたものである。すなわち、ロマ書三章廿節「我らは思う、人の義とせらるるは律法の行いに由らず、信仰によるなり。」と言う有名な箇所における最後の部分をルッターは allein durch den Glauben としたことに對して、原文には allein に當る語が見當らないから、これは勝手に改竄したのだと言う非難を駁し、次いで「昇天した聖徒は我らのために執成しを行うか」と言う問に對して否定的な返答を與えたのである。

從ってこれは普通の私信ではない。明かに公刊の目的をもったものであり、ルッターから送付されたリンクは宛名人ではなく、その刊行者であり、自ら出版の理由を序で述べている。

「・・・聖書の飜譯について多くの評がなされ、ことに眞理の敵はテキストが多くの箇所で改竄されたかの如く申立てるために單純な信者が驚いたり、おじけついたりする有樣だが、この文によって少くとも背信の徒の濱言が封ぜられ、且信者の疑いが除かれるだろうと期待できよう。」

ルッターの本文は "Dem Erbarn (=ehrbaren) und fursichtigen N., meinem günstigen Herrn und freunde" と言う呼びかけで始まる。ベルガー A. Berger はここに名指されたN氏とは實在の人物ではなく手紙の形式を取る上のフィクションであろうと言う。(註二) そう言えば成程全體は力の溢れた自由な文體で終始して章節の切れ目などないが、その結構には工夫のあとがうかがわれ、前後の簡單な挨拶を除けば試みに次の如く整理できるであろう。

(一) 問題の提示。上述の Allein を入れた理由、また聖者執成しについて尋ねたN氏の手紙を受取ったとまず問題の所在を明かにする。ここは菊版の本(註三)で僅か一〇行ですます。

(二) 第一の點について。

(イ) 自ら飜譯しない法王の徒に批評の資格ありやを問う。一一〇行に及ぶ激越な文體。飜譯の態度についても一言する。

(ロ) Allein がドイツ語法上要求される所以を說く。

はじめに飜譯の勞苦についての實驗談を述べ、次いで數箇の平易な例文により Allein の用法を說明する。またラテン文、ヘブル文との對比を行い飜譯は逐語的に行うべきでなく、よいドイツ語に移すべき原則を明かにする。

たゞし自由譯が原意の傳達を不明確ならしめる恐れがあれば一語一語原文に從った旨を添える。六八行にわたる說明。

(ハ) Allein が信仰の論理から當然の歸結だと述べる。如何なる律法の行いによっても義とされず、信仰によって義とされることをパウロと共に認める以上、この箇所に Allein を入れたことは却って論旨を明確にすると記す。この件りは九六行。

(三) 第二の點について。

聖徒の執成については聖書に根據となる記事のないこと、むしろキリストと神に直接結びつくべき旨を訴える。執成說を宣傳する舊教會の批判。この項に費された行は一一一行。

全文は短からず長すぎず菊版にして十七頁足らずと言う所であるが、右に記した行數でも分る通り、(二)の記事は全體の四分の三に及びそのうちのイ、ロが飜譯についての記事でこの項の四分の三となり全體の半分を優に占めるからルッターが Sendbrief vom Dolmetschen として發表したことは無理ではない。

ところで(一)の(ロ)から(ハ)への轉換は巧みに行われ、(ロ)は(ハ)において論理的に展開されることを先ず外側の言語の上から確實にしたのであって實は(ハ)に至る周到な伏線と解される。

(ハ)及び(三)においてはもはや飜譯の事から遠のいているが、そこに述べられた福音主義、宗教の內面性はルッターの中心思想をよく短文の中に展開したと言うべきである。

(六)の部分においては無論のこと(三)においても聖書を典據とする彼の態度があらわに語られ、これを聖書飜譯者の信仰的實踐と見れば全文は前後において有機的な關連を持っていると言えよう。のみならず後半の部分も緊張を失わない發溂な文體の故に文學的鑑賞に堪え得るものである。

三

私は以下において直接に飜譯に關係ある(二)の(イ)(ロ)における議論をなるべく彼の言に即して點檢し、言語研究上顧みるべき所があればそれに觸れて見よう。

ルッターは先ず評者に資格ありやを問う。「法皇の徒輩が聖書の一章もうまく譯せる程氣がきいていると知ってたら辭を低うして助力を求めただろう」がそんなことはできないと分っていたから「手數を省いたまで」だ。

ところで彼は「最善を盡し、良心に照らして新約聖書を譯した」のだが、「それを讀めとは何人にも强制しなかった。」それ所か「自分でそれよりよい譯が出せない人」にだけ役立たる積りである。勿論彼自身はその中に間違いを「氣付く所でなく、勿論一語といえども勝手に不當な飜譯をしようと思わなかった」程の自信を十分持っているのだが、「よりよいものを作ることは何人にも禁じられていないのだし、讀みたくないものは、おいておけばよい。それをお願いしたり、へつらったりする氣はない」と公明な態度で臨んでいる。

だが何故法王の徒を彼の書の「批判者とすることは何とも我慢できない」かと言えば、「優れた飜譯者にはどんな工夫と熱と分別が要るか」彼らはロバ程も知らないからであった。なぜなら彼らは「自分で——飜譯を——やって見なかった」のだから。彼らはマタイ傳一章のイエス・キリストの「系圖」と言う語さえ飜譯できないだろう。

このように斷じてから、およそまともな仕事をすると、何もしない者、できない者が世話を燒きたがると、ヒエロニムスのラテン語聖書飜譯の故事を例にひき、公けに善事をなす時はうるさい世間を相手に忍耐が要ると述懷する。

彼は一歩を進めて、法皇の徒が聖書の一章でも飜譯しようと言うなら讃辭を惜まないし、ルッターのドイツ譯など不要と言われる程のものを見せてもらいたいと迫る。それにもわけがあった。實はルッターの譯を批評した者が、彼の言葉を剽竊して自己の飜譯として出版したと言う妙なことがあったのである。これはドレースデンのへぼ譯者(註四)がやったのだが、ルッターの皮肉は痛烈をきわめる。

「彼は私のドイツ語は甘美でよいと言い、自分でそれに優るものができないことを承知しているくせに、しかも私の仕事にけちをつけようとして仕事にかかり、おまけに殆ど一語一語私が譯した通り私の聖書から失敬し、私の序文と註と名前をけづって自分の序と註と名前を書き、かくして私の聖書を彼の名で賣ったのだ。何たることぞ、君！彼の殿様が恐しい書出しでルッターの聖書を讀むことを呪って禁止し、しかも同時にあのルッターが作ったものと同じのへぼ譯者の新約聖書を讀むべしと命じた時、何と妙な氣がしたことだろう。此の點私が嘘ついていると誰も考えぬよう、ルッター譯とへぼ譯者の手によるものと兩方を手に取って、互いにつき合わせて見給え、そうすれば、兩者のうち何れが飜譯者だかお分りだろう。」

これはルッターの言語が彼に敵對する人々の間にも事實上高く評價されていたことをよく物語るものである。他にもルッターの名が冠せられない限りは立派なドイツ語と認める君主がいたことが傳えられて居り、右の言の誇張でないことが分る。すなわちザクセン公ゲーオルク Georg はカトリックの教徒として甚しくルッターを嫌悪していたが、或時畫家のクラナハ Lucas Cranach に對して「お前は常にルッターをほめて彼奴だけが立派なドイツ語を話し、立派な本を作れると言うが、この點も他のこと以上に違っているぞ。まあこの本を見ろ、あのルッターなどは決して出來ないほどよいものだ」と述べたので、クラナハはその本の著者こそルッターで私は彼のサイン入のものを持っていますよと一冊とりだして見せた所、公は "Ist's doch schade, dass der heillose Mönch solch ein gutes Büchlein hat machen sollen" と不快に叫んだと言われる。(註五)

さて右の剽窃事件について彼は徒らに怒らず、「非難した他人の勞作によって己れの名とほまれを求めることがどんな德であろうとも、それは審き主に委ねることにする」と述べ、「我が勞作が敵によって奬められ、ルッターの本がルッターの名でなく敵の名で讀まれざるを得ないことをむしろ喜ぶ」のである。

そこには「さらばいかん、外貌にもあれ、眞にもあれ、いずれも宣ぶる所はキリストなれば我これを喜ぶ」（ピリピ書一の十八）と言ったパウロの氣慨に通うものがある。

そこでN氏に告げて曰く「法王の徒輩が sola＝allein をうるさく言うなら、すぐさま言ってやれ、マルティヌス・ルッター博士が欲するからそうするまでだ。」と。

法王の徒輩とロバとは同一物、そんな手合に一々理由を告げてやる必要はないと高飛車に出、彼らに批評者としての資格ありやとの追打ちをかける。この當りからポレミックな文體は一層調子づいて來ることが認められる。

「彼らが博士か。我も然り（Ich auch）。彼らが學者か。我も然り。哲學者か。我も然り。神學者か。我も然り・・・」當時の智者に屬するあらゆる身分を呼び出し、簡潔な Ich auch で應ずること九度に及ぶ。これまた彼自ら斷るようにコリント後書十一章のパウロの語調に通うものがある。「彼らヘブル人なるか、我も然り（原語 kárē 獨譯 Ich auch）彼らイスラエル人なるか、我も然り、彼らアブラハムの裔なるか、我も然り。」（二二節以下）

パウロの Ich auch は三回であるけれども、ルッターはその三倍も重ねて居り、さらに我が優者であることを徹底的に告げる態度に出る。「我は飜譯できる。彼らはできない。（Das können sie nicht）我は聖書を說き明かせる。彼らはできない。我は聖書が讀める。彼らはできない。我は祈り得る。彼らはできない。」

もともと彼らの業で育った自分だ、彼らの哲學、辯論、實は彼ら以上によくできるのだ、それなのにまるで今朝當地に來た新參者のように扱うと言を繼ぎ、「馬蹄のかねが鉄だとは七年前に知ったこと（Ich habs fur siben jaren gewist, das huffnegel eysen sind）とあの小娘（註六）と一緒に、彼らのうるさい叫び聲に歌い返してやらねばならない」

と酒落れた文句を附け加える。彼は第一の問には以上の言を答えにしようとする。

なおロバの徒がうるさく sola について求めるなら「全カトリック教會の上にいるルッターがそうしたいからするまでだ」と問答無用の宣言を行い、たゞし君や味方の人々にはなぜ自分が sola を用いたかったか教えてあげようと巧みに本題に轉じて行く。

ここでルッターは周到に、カトリック側が言語理解が不十分なため、問題の提出にずれがあることを一應指摘している。「本當のことを言えば、私がロマ書三章で用いたのは sola ではなく solum 或いは tantum であった。だからロバ公共は我がテキストをよく讀んだと言うものだ。だが私はどこかで sola fide（單なる信仰により）と言う語を用いた。實は solum と sola の兩方とも使いたいのだ。」

ここに solum と sola が出てきて煩わしいが、sola は「單なる」と言う意味の形容詞だからドイツ語の allein とは意味が一致しない。

allein に當る語は solum 又は tantum である筈。

だから彼らがルッターの allein を目して sola を入れたと騒ぐのは一寸見當違いだと虚をついたのである。

彼は語法について說明する前に飜譯に臨んでの原則と飜譯の努力を述べる。この所は大ていの文學史にその一部が引用されるを常とする。

「私は飜譯に際し、純粹明白にドイツ語の表現をしようと努めた。（Ich hab mich des geflissen ym dolmetzschen, das ich rein und klar teutsch geben möchte.」

飜譯はこなれたドイツ語で表現すべきこと、これが彼の公理である。しかし實際にそうするまでは甚しい苦闘があったことを物語る。「我々は二週また三週、四週かかって一語を探し求め、しかも見出せなかったことすらたびたびある。ヨブ記ではメランヒトン、アウロガルルスと私が、時には四日かかって三行と譯し終えなかった程だ。さて

君、譯ができて見るとどうだ。誰でも讀んでそれを批評することができる。今人々が三頁、四頁と眼を走らせて一度も躓かないと言っても、カンナをかけた板上を行くようにすらすら進める所にはかってどんなにか石ころや木株があったか氣付かない。我々がそれらを取除いて、皆が具合よく通って行けるようにするために、どんなに汗水たらして苦しんだか知れないのだ。畠がきれいになっていれば耕すのは樂なこと。だが森に手を入れ、木株を除いて畠を整えること、これはやり手がない。」

かってヴァルトブルクで三ケ月と言う短期間で新約聖書を譯し去ったルッターではあったが、刊行の運びとなるまでの間にどれ程推敲したか、また舊約の飜譯でどれ程手數をかけたかはメランヒトン等の筆によってもうかがえるが、右の言に接してわが杉田玄白の蘭學事始め中の眞劍な記事を連想する人もあるであろう。勿論一つは母語への表現の努力であり、他は原文の理解の苦闘だと言う差はあるが。

ルッターが飜譯者の勞を開墾に比し、讀者の勞を整理された土地の農耕にたとえたことは平易ながら獨創的な比喩で彼はこのように對比したとえをよく好んで行っている。

ところでこのような勞が報いられぬことも「天地を創り、あまつさえ獨子を死なせ給うたにもかかわらず何ら世より感謝を受け給わぬ神」のことを思えば何ともないと言う。

このようなわけで彼はロバ達が sola について文句を言うが、實は「sola ではなく solum がギリシャ語やラテン語のテキストにないのを知っていた」けれども、しかも明白に力強くドイツ語に譯そうとすれば必要になると主張する。なぜなら彼は「飜譯においてラテン語やギリシャ語を語ろうとしたのではなく、ドイツ語を語ろうと企てたのだから」と今一度飜譯の原則を明かにかかげ、今度は allein が必要なのはドイツ語法の然らしめる所とだ實例によって縷々說明するのである。

「二つのことについて一方を肯定し、他方を否定する表現をなす場合、nicht や kein と並んで solum（＝allein）

と言う語を用ふるのがドイツ語である。たとえば Der Baür (=Bauer) bringt allein Korn und kein Geldt. nein, ich habe warlich ytzt (=jetzt) nicht geldt, sondern allein Korn. Ich habe allein gessen (=gegessen) und noch nicht getruncken. Hastu (=Hast du) allein geschrieben nnd nieht uberlesen? の如く。

これらと同じ表現が日常の語法に無數に存在する。これらすべての場合、ラテン語やギリシャ語ではやらなくてもドイツ語ではやるのだ。nicht や kein と言う語が完全に、よりはっきりするため、allein を附するのがドイツ語法である。なぜなら、私は Der Baür bringt korn und kein geld と言わぬことはなふが、allein を用ふた程には kein geldt が完全且明瞭に響かなふ。Allein と言う語は kein を甚だうまく助けて、完全なドイツ語、明白な表現とするのである。」

原文にもラテン語聖書にも allein に對應する語がなふが、ドイツ語譯にあってならぬとは言えなふ。單語は文中にあって互いに他の語と張合って職能を果すのだから切離して扱うべきでなく、ドイツ語全體として見るべきだと言うわけで、allein を入れたことが不當でなく、かえってドイツ語らしい表現にするとの釋明である。これは簡單だがルッターが母語の性質を十分理解していたことを示す言說であることは言うまでもなふ。

さらに、當時文法と言えばラテン語のものばかりで、ドイツ語法についての組織的な論述や文例の集成がなかったのだから、ここに allein と否定詞の關係を論じて、說明のために數箇の文例をあげたのは當時の語法を知る大切な手掛りとなる文獻だと言えよう。そして、音韻及び文法の構造においてはザクセン官廳語を範とした彼が表現法においては日常の表現を參考としたことをよくうかがわせるものである。これを補って "Den (=denn) man mus nicht die buchstaben inn der lateinischen sprachen fragen, wie man sol Deutsch reden, wie diese esel thun, sondern man mus die mutter jhm (=im) hause, die kinder auff der gassen, den gemeinen man auff dem marckt drumb fragen und den selbigen auff das maul sehen, wie sie reden, und darnach dolmetschen, so

verstehen sie es den und mercken, das man Deutsch mit in reden.” と纏めた所はどの文學史、語史にも――綴字を改めた上――引かれる名文である。事實彼は必要とあれば金物細工師の仕事場に通い、山羊を屠る場所に居あわせて、獨特な表現を傾聽したと言われている。

右の言や事實は、言葉の生きた姿は固定した文字の上ではなく、實際に語られる言語に見られると、十九世紀になってから專門の學者がやかましく論じ出したことであるが、ルッターは飜譯に當って十分心掛けていたことを告げてくれるものである。

次にルッターは原意を把んでよいドイツ語で表現をする必要のあることを一層明白にさせるためにラテン語新約聖書の表現と自分のよしとする飜譯とを對比して行く。

一體彼はギリシャ語の原文から譯したのだから、それとの比較を行うべきであるのだが、當時のカトリック僧侶の多くにギリシャ語の知識はなく、教會の言語、學術の言語としては專らラテン語が用いられたので、これと比べて本文が廣く讀まれるように配慮したのである。

先ず Ex abundantia cordis os loquitur 邦譯「それ心に滿つるより口に言わるるなり」（マタイ傳十二ノ三四、ルカ傳六ノ四五）

法王の徒はこれを直譯して Aus dem uberfluss des hertzen redet der mund と言うだろうが、そんなものは果してドイツ語かと嘲る。uberfluss des herzen（Überfluss des Herzens）と言えば大きすぎる心臟か allzu ein grosz hertz 或いは餘りにも多くの心臟を zu viel hertzes 持つことになりかねないと述べ、自分は Wes das hertz vol ist, des gehet der mund uber と譯したが「これこそよいドイツ語と言うべきで、私はそれを求めに求めたのだ」と說明する。しかし彼は必ずしも常に滿足していたわけでなく、その努力も「殘念なことに未だすべての點で達成したわけではない。何となればラテン語の文字が立派なドイツ語にするのを甚しく妨げたから。」――常に殘る飜譯者の

不滿をここにも正直に吐露している。

次はイスカリオテのユダが、香油の壺をそそぎ出してイエスを拭ったマリヤを咎めた言 Ut quid perditio hoc「何故かくみだりなる費をなす」（マタイ傳二六の八）Ut quid perditio ista ungenti facta est?「何故かくみだりに油を費すか。」（マルコ傳十四の四）

ロバ達に從えば Warumb ist dise verlierung der salben geschehen となろうが、それではお話にならない、本當の「ドイツ人なら Was sol doch solcher unrat? 或は Was sol doch solcher schade? それどころか Es ist schade umb die salbe と言おう。これこそ立派なドイツ語」である。

第三はルカ傳第一章二八節において天使が處女マリヤに挨拶して「めでたし、惠まるる者よ、主なんぢと偕に在せり」と言う所である。ルッターはもはやラテン語文を引用せず、カトリッタ側が直譯するであろう所の一文を示し、——Gegrüst seistu Maria vol gnaden, der Herr mit dir.——それを批判しつつ己れの譯と對比する。「du bist vol gnaden とは一體どこのドイツ人の言うことか。」彼は vol gnaden と言えばビールの一杯入った樽 ein vas vol bier や金の詰った財布 beutel vol goldes を聯想せざるを得ないとユーモラスな發言をする。結局彼は思い切った譯語で Du holdselige とした。こう言う譯では敵はマリヤを冒瀆すると言っていきまくだろうと察するが、彼はそれでも十分でなく Got grusse dich, du liebe Maria と言いたかった旨を添える。「およそドイツ語のできるものは du liebe Maria, der lieb Gott, der lieb Kaiser, der lieb fürst, der lieb man, das lieb kind などの表現がどんなに情のこもった美しいものであるかを心得ている。」そして彼はこの lieb と言う語がラテン語や他の言語では到底言い表わせぬ程の情の籠ったもので、ドイツ人の心琴に觸れる表現をすると言う。

さらに舊約聖書の場合を一つあげ、天使がダニエルに呼びかけた時、ドイツ語で言ったならやはり Du lieber Daniel としただろうと述べる。ヘブル語の Daniel hamudoth 又は Isch hamudoth は直譯すれば Daniel du man

der begirungen 或は Daniel, du man der lüste となるかも知れないが、それは大したドイツ語だ、man, lüste, begierunge（本當は lust や begyr の方がもっとよいと附け加える）はそれぞれドイツ語中にあるものだが、それをつないで du man der begyrungen などと言えばドイツ人は了解に苦しんでダニエルは悪い欲望をもっていると思うだろうと言う。單語の羅列で足れりとすべきでないと言うのがその箇所の要點である。彼はおよそドイツ人なるものは Du lieber Daniel, du liebe Maria, du holdselige mad（＝Magd), du niedlich jungfraw, du zartes weib と言うのだとこなれたドイツ語をたゝみかけ、飜譯しようとするものは語彙を豐富に貯えておき、單調な表現を行わぬようにと注意する。

ここでルッターは飜譯に當って自分が用いた表現を釋明したら「それだけでも一年も書續けなければなるまい。飜譯がどんなに勞の多い仕事であることは十分解っている、何も試みなかったものに批評されたくない。」と初めの言にもどって行く。

そこには敵に對する痛罵が見られるが、またこの飜譯で一文ももうけず（！）、たゞ神の榮光のためにやったのだと言う動機の純粹を力强く訴える言が重ねられ、「一人のキリスト者だに忠實な勞働者を認めてくれるなら我が勞は報いられて餘りがある。敵のおこがましい稱讃こそ心が痛む、彼らの瀆言は最大の榮譽である」とさえ極言する。

飜譯論の終りに近ずいた所で彼は第二の公理を揭げるが、その例はもはや簡單なものとなっている。ルッターは「よいドイツ語」で表現すると言っても意譯でおし通したのではないと注意する。「私は餘りに文字に忠實でないようなことはしなかった。必要とあれば文字に從ってやり、勝手に離れないように細心の注意をした。ヨハネ傳六章でキリストが Diesen hat Gott der vatter versiegelt『父なる神は此の者を印し給えり』と言われているが、Diesen hat Gott der vatter gezeichnet 或いは diesen meinet Gott der vater の方がもっとよいドイツ語であったろう。」でも彼は原語から遠ざかるよりはドイツ語を「破ろう」,,abbrechen'' としたと言うのである。彼が言う所の「文

字」,,Buchstabe" は正確には「語」,,Worte" と言うべきであろうが、それは餘り取立てて論ずる必要はあるまい。ゲルマン語學の礎を署いたグリムでも「文字」と「音聲」とを區別せず Buchstabe と記していたのだから。

かくして飜譯論は結びに入る。「あゝ飜譯とは誰にもできる業ではないのだ」と言い、それには正しい信仰と誠實勤勉、博學と經驗と錬達の心を要すると斷じて、筆は一氣に信仰の論理に轉じて行くのである。

四

以上の所論は平明であって、これをさらに敷衍することは蛇足であろう。その文學的な價値の認識はこの發溯たる議論を原文によって味讀しようとする者なら自らできるのだと言いたい。私がなお少しく言を繼ぐのは、ルッターの文の内容に關してではなく、ここに記された言語そのものがドイツ語史の研究に興味ある事實を示していることを指摘したいからである。第一にそれは語義の變遷と言うことを痛切に考えさせる。第二にはドイツ語とラテン語の交渉の深さを告げて止まない。

ここに記された言語は一五三〇年のものであるからルッター獨語の中期に當る。そこには「基督者の自由」,,Freiheit eines Christenmenschen" 1520 や新約聖書初版 ,,Septemberbibel" 1522 等に見られる特異な中部方言の要素は殆ど拂拭されている。しかし何しろ四三〇年も前のドイツ語であるから綴字、形態、文章論、語彙の各分野において現代語と相當差があることは言うまでもない。(註七)

しかし今日普通に用いられている語彙も現在とは異る意味を持つものであるものが相當數に上るのである。標題にかかげられた dolmetschen からして、それが mündlich übersetzen の意味に限られていなかったことは、語源辭典の厄介にならずとも本文の最初の一頁に目を通しただけで分る所である。問題のュマ書の箇所において wir halten das.... が「我らは思う・・・」の意味に使われているが、今日では wir halten *dafür*, dass.... としなくて

はならない。さらにルッターが力を籠めて說いた allein の用法も現代のドイツ文語では必ずしも同一ではない。なるほどこの語は前に述べたことと對立する叙述を導ぴき、その意味は aber より强いけれども、彼の言うように否定の事柄と關連して用いられるわけではなく、接續詞としては文頭に置かれるのが普通である。從って彼が擧げた Ich habe allein gessen (=gegessen) und noch nicht getrunken. Hastu (=Hastu) allein gessen (=gegessen) und noch nicht getruncken. Hastu (=Hast du) allein geschrieben und nicht uberlesen? と言う例も現代のドイツ散文では自然とは言えなくなっている。ルッター鏤骨の名譯と言われる „Wes das Herz voll ist, des gehet der Mund über." (綴字を現代化したもの) はベーゼッケ G. Baesecke によれば當時の口語にもとずく表現であるが、これは今日ルッター鑄造の格言として耳朵を打つものであり、現在普通の文としては wes, des は勿論のこと、über-gehen や überlaufen に代られ、„Wovon das Herz voll ist, davon läuft der Mund über." となる筈だと言うことである。(註八) なお私の氣付いた所を記せば次の諸語が——の次に書かれた意味を示している。Bericht——Unterricht, bekennen——bejahen, Unrat——Verschwendudg, verhoffen——erwarten

現在自動詞として使われるのが普通である brennen, ketzern, urteilen, zeugen などは他動詞となっている。だから形が同一であっても解讀に注意を要することが一再ならずある。

ラテン語との交渉が如何に深かったかは聖書の原文が示されずにラテン文が記されていることでも察せられたが、ルッターの用語においても認められる。彼の聖書をはじめ各種の散文においてなるべくドイツ語本來の語彙を使った點が十分認められるが、それでも今日のドイツ語に比べればラテン語彙の使用される率が多い。本文には——序を含めて——Scrupel=Zweifel; materi=Stoff; questionen=Fragen; glosz=Glossar, Ausdeutung; proenium=Vorrede, capitel=Hauptstück, exempel=Beispiel などがあり、最後の二つ——就中綴字を修飾した Kapitel——の他は今日文語に普通現われるものではない。また今日使われる語ではあるがラテン語の變化に從っていたものをそ

のまま記せば Philosophia, Dialectica, Biblia, Apocalypsi, Evangelii (——o), Theolog:, Philosophi, Doctores などがあげられる。現代でも使用されルッターにおいてもすでにドイツ語的な變化を行つているものは Prophet, Psalm, Sophist, Testament がある。

注目すべきは一つの事柄をドイツ語とラテン語の兩方を以て表現することで fragestuck odder materi; questionen odder fragen の如き例がある。これはルッターがよく行い本書にも見られる同義語の重ね——vol und rund, krafft und macht, wirken und schaffen, putzen und schmücken——とは性質を異にしている。それは修辭上のあやではない。知識層はいかめしいラテン語彙を使用するのが常であり、大衆は親しい母語の表現に生きるのだが、その併用は双方に意志の傳達を圖ろうとする筆者の意圖である。

註

(一) ザクセンは當時フリードリヒ、ゲーオルクの兄弟が分有していた。前者は選擧侯でルッターの保護者であり、後者は彼を憎む者であつた。官廳語については前者に主導權があつたが、相隣るものであつたから兩者は共通の言語となつていた。

(二) A. Berger: Grundzüge evangelischer Lebensform und nach ausgewählten Schriften Luthers, Leipzig 1930 Verlag von Philipp Reclam, S. 330.

(三) 右の本のことである。

(四) ルッターがへぼ譯者 (Sudler) ときめつけた人はエムザー H. Emser で、ルッターの聖書の手きびしい批判を行い、自らも譯譯し一五二七年ザクセン公ゲオルクの序を附して刊行した。

(五) F. Kluge; Von Luther bis Lessing, Straßburg 1897 Verlag von Karl J. Trübner, S. 40.

(六) ベルガーは上掲書において (S. 275)、當時の笑劇のことを言つていると推測している。

(七) 本文の語法全般については私の手許にそれを纏めた草稿がある。

(八) G. Baesecke: Die Sprache der Lutherbibel und wir, Halle 1932 Verlag von Max Niemeyer, S. 9.